

ドゥルーズの『差異と反復』における

理念の自己規定について

—なぜ理念は自身を自分で規定するのか—

浅野 修平

ドゥルーズは、『差異と反復』において真に自身の哲学と言いうる独自の存在論を構成している。『差異と反復』まではドゥルーズは他の思想家に言及するモノグラフィーを書いていたのであり、自身の哲学について体系的に記述したのは、『差異と反復』が初めてである。『差異と反復』において展開されているドゥルーズの哲学は、一言でいえば、様々な思想のコラージュであり、そのため『差異と反復』を構成している特異な概念群（理念、強度、発生など）は、たしかにドゥルーズ独自のものであるが、同時にそのひとつひとつが哲学史的背景を持つような概念群である。こうした概念群については、以上の理由からドゥルーズの独自性が見えにくくなっており、哲学史の伝統から慎重にその独自性を取り上げなければならない。本稿の意図は、『差異と反復』における特異な諸概念の持つその特異性、独自性を汲み取ることにある。もちろん諸概念すべてを扱うことはできないのであって、本稿では、『差異と反復』を構成している概念の中でもとりわけその存在論の中核をなす「理念 (Idée)」について考察する。理念は、『差異と反復』の序論から散発的に言及され、第四章で厳格な定義が与えられる。『差異と反復』の意図が、差異それ自体に対する考察なのだとしたら、差異それ自体は、差異化＝微分化 (différentiation) と差異化＝分化 (différenciation) という二つの半身からなる。前者は潜在的な理念、問題を規定し、後者はこうした潜在的なものの現働化 (actualisation)、解の構成を規定する。そして理念は、潜在的なものであり、現実的な (actuel) 諸物を構成する超越論的境界として実在的である (réel) といわれる。

ところで、ドゥルーズ哲学の代名詞として、ドゥルーズの「複写批判」がし

ばしば持ち出される。複写批判とは、超越論的境域を超越論的境域が条件づけている（あるいは発生させている）ものから説明することに対するドゥルーズによる批判である。条件と条件づけられているものは、まったく似ていないのであり、条件づけられているもの、つまり条件の結果、あるいは経験から条件を推論することには常に不確実性がつきまとうのである。だが、哲学、あるいは超越論哲学は超越論的境域を描かざる得ないのであり、しかも我々には超越論的境域が産出した結果である経験的要素しか与えられていない。描く手段としてどうしても経験的要素を抽象化した、この意味でのメタファーを用いざるを得ないのであれば、超越論的境域に経験的要素が入りこむことは不可避であるように思われる。我々はここで次のことを理解しなければならない。ドゥルーズの言う複写批判は、ただ超越論哲学が経験的要素を含むことへの批判ではなく、超越論哲学が採用してきた超越論的境域を描く方法論に対する批判なのである。その本質は経験的要素を完全に消し去るところではなく、経験的要素をどのように扱うべきなのかというところにあるのだ¹。したがってドゥルーズの哲学は、旧来の超越論哲学が採用してきた方法論とは異なる方法論で超越論哲学を書き換える試みであり、そして書き換える中で超越論哲学における伝統的諸概念（理念、感性、美学など）は、名前はそのままに内実を変える。こうした内実の変化にこそドゥルーズの独自性はあり、本稿の「理念」の担う意味もまたここにある。

本稿では、①カントの理念からドゥルーズの理念への移行、②ドゥルーズの理念の自己規定、③事物における理念の役割と理念＝潜在性の独自の位置づけ、これら三つのテーマについて考察を進める。つまり、まずカントの超越論哲学において理念がどのように描かれているかを概観し、複写の原理とその不十分さについて考察したのち、ドゥルーズの採用する新たな原理の内実を述べる(①)。次にドゥルーズの理念の中身、つまり理念がいかにして自身を自分で規定するかを考える。カントの理念が経験の対象や悟性のカテゴリー（純粋悟性概念）によって規定を受けていたのに対し、ドゥルーズの理念は、自身で自分を規定するのであり、規定の原理は理念の内に存するのである。この意味で理念は理念自身が産出したもの、つまり条件づけられているものから規定される必要がなくなり、「問題」という存在論的身分を持つ理念をその解に依存させず

に済み、現象の発生的要素になることができる (②)²。最後に、こうして現象の発生的要素となった理念は現象を産出することになるが、理念が現働化される際に、理念がその過程においてどのような役目を果たすかを考察する。あらゆる事物には理念的な部分と現働的な部分がある。理念は事物の理念的な部分であり、それゆえ事物にはまだ理念的ではない他の部分が残っている。つまり、差異化＝微分化だけでは事物を完璧に規定することはできず、あくまで十分に規定しているだけなのである。デカルトが言うように、十分な規定と完璧な規定を混同してはならないし³、こうした混同を防ぐことで、この混同に由来していると思われるドゥルーズの存在論とベルクソンのいわゆる生氣論との不用意な混同を避けることにもつながるだろう。どちらの哲学においても潜在性は大きな位置を占めており、たしかに類似しているように思われるが、しかし両者はやはり明確に異なる概念であり、峻別されなければならない。そして、事物を完璧に規定するためには、差異化＝微分化に加えて、差異化＝分化が必要なのであり、二つの似ても似つかない半身が組み合わせさなければならない⁴。二つの半身がどのように組み合わせるのかを概観して本稿を終えたい (③)。

●カントの理念と理念を描く方法

ドゥルーズは、『差異と反復』や『カントの批判哲学』においてカントの理念について触れているが、ドゥルーズがカントの理念をどのように捉えているのかを簡単に見ておこう。ドゥルーズによれば、カントの理念は、①それ自体では未規定なものであるが、②経験の諸対象との類比によって規定可能なものであり、さらには③悟性概念との関係においては規定作用として無限の規定を担うものである⁵。認識という観点からすると、現象を構成するのは悟性であり（構成的使用）、悟性の所有する純粹悟性概念であるのだが、理念はそうした純粹悟性概念を統率し、統一を与える（統制的使用）。もちろん理念は現象を構成するのではない以上、理念が現象に現れることはなく、この意味で経験を超越している以上、まったく未規定的である (①)。だが、理念が現象を構成する純粹悟性概念を無限へと収斂させる以上、現象は無限に条件からそのまた条件へと遡ることが保証された形で構成され、諸現象は理念を内容として含んでい

なければならない。よって、現象は理念を象徴するわけで、たとえば白いユリは〈無垢さ〉を象徴する（ユリの白さは〈無垢さ〉に類比している）ことで、理念を間接的に示すこととなる⁶。このように、理念は経験の対象との類比によって規定可能なものとなる(②)。そして理念が統率する純粹悟性概念との関係においては、理念は純粹悟性概念が理念に向かって収斂していかなければならないにもかかわらず、到達することのない地平として現れ、規定作用として無限という規定を受ける(③)。

したがって、「理念は、一方では、それ自体において未規定的であり、他方では、経験の諸対象と関係する場合にしか規定可能にならず、そしてそもそも悟性概念と関係する場合にしか規定作用という理想を担わないのである⁷」。ここでカントは、それ自体で未規定な理念を、理念自身からではなく、理念がもたらす結果（現象、純粹悟性概念の統率）から規定しようとしているのであり、条件づけられたものから条件づけるものを描いている。

●カントの方法に対する二つの分野からの批判——ドイツ観念論と数学

カントはこうした方法によって理念を描くだけでなく、アприオリな概念もまた同様の方法で描き、基礎づけようとするが、主にアприオリな概念を基礎づける際にこの方法を用いたことをドイツ観念論によって批判されている（ドイツ観念論者、とりわけラインホルト、シュルツェ、マイモンといったドイツ観念論者は、カントのアприオリな概念の基礎づけの仕方を批判するのであって、理念の描き方そのものをあまり批判したりはしない）。アприオリな概念は、それなしでは経験、認識が可能にならないようなものであり、権利上経験に先立ちそれ自体で存続して（subsister）いなければならない。それゆえ、アприオリな概念は経験によって基礎づけられることで妥当性を持つのではなく、それ自体で妥当性の基準を保有しているはずである。たとえば、三角形の持つ性質は、必然性と普遍性を持っているが、これらは作図によって妥当なものとされるのではなく、むしろ逆に性質それ自体が妥当性を持つがゆえに、実際に作図することができるのである。この意味で作図（ができたという事実）は概念からすると外在的な事実であり、概念を基礎付ける内在的な基準にはなりえな

い⁸。たとえ作図によって三角形の性質を知ったとしても、それは主観的必然性を持つ性質にすぎないのであり、ヒュームの懐疑からは決して逃れられない⁹。こうして、ドイツ観念論は、カントが外在的な事実¹⁰に依拠しアプリアリな概念を描いたことを非難し、権利問題を解決するべく内在的な発生論へと向かうのである¹⁰。

ところで、カントは理念を問題とも呼んでいた。理念は純粹悟性概念に対してひとつの問題として現われ、問題に解答するように迫ることで、純粹悟性概念は理念に向かって収束していく。だが、理念はたしかに問題であるが、純粹悟性概念によって解かれることはない解なき問題である。ただ、ここで我々は理念が偽なる問題であるとか、解決不可能な問題であると理解してはならない。むしろカントが言いたいのは、真なる問題は、その解によって削除されえないということなのであり、真なる問題の正しさは、もちろん解く事ができるということに反映される¹¹。カントは真なる問題の意義をこのように正しく理解していたが、にもかかわらず真なる問題を正しく規定することはできていない。複写によって、解から理念＝問題を描いてしまうからである。ここには数学においても重要な循環が現われている。「すなわち、ひとつの問題は、その問題が「真」であるかぎりにおいて解決可能であるのだが、しかし我々はつねに、ひとつの問題が真であるということ、その問題が解決可能であるということの方から定義しようとする、という循環である¹²」。そして「我々は、解決可能性という外的な指標を、問題（《理念》）の内的な特徴に基づかせる代わりに、その内的な特徴を、そのたんなる外的な指標に依存させてしまうのである¹³」。つまり、我々は問題の解決可能性を実際に解けたという事実、それも行き当たりばったりの事実¹⁴に依存させてしまうのであり、こうした循環を打破しなければならない。この循環を数学において打破したのは、まさしくアーベル（とガロア）だった。アーベルは問題の解決可能性を問題の持つ形式から生じさせることに成功し、だからこそ「アーベルは新『純粹理性批判』を創始し、こうして外在主義を超克したと人々は言うことができたのだ¹⁴」。

ドゥルーズは、『差異と反復』の第四章において、ドイツ観念論と数学という二つの分野からのカント批判を利用し、カントの理念を描きなおす。問題と解の新たなモデル、そして新たなモデルを描くのにふさわしい方法、さらには

たとえ秘教的でありながらも確実に連綿と続いていた、こうした方法を探究する哲学、これらが第四章において総合されているのもこうした背景をもとに理解されなければならない。

ドイツ観念論が、アプリオリな総合判断の正当性をアプリオリな概念からは外在的なその結果（作図）から基礎づけるカントの方法を非難し、概念自体に内在する原理によって基礎づけを遂行する方法、つまり発生的方法を考案し、カントの条件づけを克服しようとしたのと同様、そしてまたアーベルが、問題という存在論的身分を持つ理念をその解に回収してしまったカントの方法を非難し、問題の身分を問題そのものによって構成する方法を考案し、カントの外在主義を克服しようとしたのと同様、ドゥルーズは、カントの理念を理念の結果からではなく、理念それ自体から規定することができるように、理念の概念を塗り替えるのである¹⁵。理念は、未規定的で、規定可能で、規定作用を持つものであるが、これらを理念自身は混同することなく所有し、なおかつ、それぞれに対応する原理をも有していなければならない。こうした理念を描くために、ドゥルーズは差異的＝微分的哲学の秘教的な歴史、微分についての野蛮で学問以前のといわれるような解釈の歴史へと向かう。ここで言われる微分(dx, dy)とは、いわゆるライプニッツ的な無限小のことでは全くない。むしろ大小に回収されることのない、あるいは大小によって語られることのない、存在論的身分を持つものである。このような秘教的な歴史のもとでは、微分は次のように理解される。つまり、まず微分はそれ自体で未規定的である。数学においてdx, dyが具体的な値(quantum)を持たず、また或る範囲における可能的値の全体を示す値(quantias)(例えば、 $0 < x < 5$ という範囲を規定されたx)も持たない——両者はともにそれ自体で規定を持つ値である——のと同様である。次に微分dx, dyは、それ自体で未規定的だが、dx/dyという差異的＝微分的な関係に入ると、規定可能となる。微分は、それ自体では未規定的であるとしても、他の微分との関係において規定されることが可能であるため、それ自身によって規定可能性を持つ事ができる。そしてドゥルーズはこの微分を理念と考えているのである。理念は自身を自分で規定することができるのであり、それ自体で客観性をもつことができる。このようにドゥルーズは結果からではなく、理念それ自体によって自分自身の規定を可能にするような理念を差異的＝微分

的哲学から引き出し、利用しているのである。

●理念は事物を十分に規定するが、完璧には規定しない

ドゥルーズの理念は現象の充足理由であり、事物の一部である以上、事物を十分にしか規定しない¹⁶。十分な規定とは、事物における理念的な部分の規定であり、差異化＝微分化によって規定されている部分である。よって、事物には理念的な部分以外の部分、つまり現実的な部分が残っているのであり、この現実的な部分は別のプロセスによって規定されなければならない。このプロセスがなければ、理念はただの理念に留まり決して現実的に存在することはないだろう。そして差異化＝分化こそ残りの部分の規定を行うものであり、現働化を遂行するものである。

差異化＝分化に特有の方法は、差異化＝微分化が微分法を自身に特有の方法としていたのに対し、積分法である¹⁷。そして「積分法は、決して差異化＝微分化を逆にしたものではない¹⁸」と言われる。この意味を我々はドゥルーズの記述に従って次のように理解しなければならないだろう。

ドゥルーズが述べているように、事物はひとつの原始関数である。原始関数は、微分されることで本性的に異なる導関数を導き出す。この導関数がドゥルーズのいう差異的＝微分的な関係であり、事物の中の理念的な部分を規定している¹⁹。たとえば、三次関数（原始関数）の微分である二次関数が三次関数の曲線の形を規定し、特異点の位置を決めるように、事物は微分によって十分に規定されている。だが、導関数だけで原始関数を引き出すことができないように（導関数に加えて定数が必要である）、微分だけでは事物を現働化することはできないのであり、微分法とは異なる方法である積分法が必要である。積分が数学において導関数から原始関数を導くときに導関数とは本性的に異なる定数をつけなければならない、ただ微分法と反対の道を辿っているのではないように、ドゥルーズの積分法は微分法とは全く異なるプロセスとして事物を現働化し、こうして事物は完璧に規定されるのである。

まとめれば、差異それ自体とは、差異化＝微分化と差異化＝分化という類似していない半身からなっている。「一方は潜在的なイマージュであり、他方は現

働的なイマージュである。不等で、非対称な二つの半身。差異化＝微分化それ自体が、それなりにすでに、二つの側面をもっており、この二つのうち、一方は関係＝比の変化性に対応し、他方はそれぞれの変化性の値に依存する特異点に対応しているのだ。また、差異化＝分化の方でもやはり、二つの側面を持っており、一方は、変化性を現働化する様々な質あるいは種に関わり、他方は特異点を現働化する数あるいははっきり区別される部分に関わっているのだ²⁰。

以上の議論からドゥルーズの『差異と反復』における理念が持つ潜在性の独自性を引き出すことができるし、また混同されがちなベルクソンの生氣論における潜在性と区別することができる。いわゆる生氣論について概観しておけば、ベルクソンにおける物質と持続の対立のように、物質にはない性質を生に認め、あらゆるものを生から導こうとする存在論である。生氣論は不定形の根源的生のようなものから形ある世界が出来上がるというモデルで世界の発生を考えるのであり、生氣論においては、不定形の根源的生が潜在的なものであり、この生が現働化することで現実的世界は出来上がる。

ところで生氣論における潜在性と現実性という対概念は、可能性と現実性という対概念とは縁がないものである。この点について議論することは無数にあるとしても、ここでは次の二点を指摘しておけば事足りる。つまり i) ライブニッツの可能世界論において無数にある可能世界から最善の世界が実在化 (réalisation²¹) することが可能世界だけでは可能ではなく神の介入が必要であることから分かるように、可能性にはそれ自身に実在化の力能がないのに対し、潜在性はそれ自体で現働化の力能を有し、潜在的なもの自体から現実の世界が出来上がるということ、ii) ベルクソンによる可能性批判によって有名なテーゼだが、可能性とは出来上がったものを過去に投影することでしか可能にならないものであり、それゆえ可能性と現実性はきわめて類似したものになるのに対し、潜在性は出来上がったものから描かれるものではなく、それゆえ潜在性と現実性は全く似ていないということ。

このように生氣論における潜在性は、自らのうち実在化する力能を有しているが、ドゥルーズの『差異と反復』において描かれている潜在性を、このような潜在性と同じものと考えてはならない。なぜなら潜在性＝理念は自らのうちに現働化する力、強度 (intensité) を有しておらず、あくまで事物の十分な規定

という位置づけだからである。現働化は潜在性＝理念とは全く異なる半身によって遂行されるのであり、潜在性＝理念だけでは現働化することはできない。また潜在性＝理念だけで現働化できないからといって、潜在性＝理念が可能性のようなものであると考えてもならない。可能性と現実性は類似したものであるが、ドゥルーズが何度も繰り返し指摘しているように、潜在性＝理念は現働化した事物とは似ても似つかないものだからである。

つまり、ドゥルーズの潜在性＝理念は、事物の理念的な部分であり、それ自体では現働化することはなく、また現働化したものとも類似していない。こうしてドゥルーズの存在論は、ライプニッツの可能世界論とも、ベルクソンの生氣論とも峻別されるのである。

●おわりに

ドゥルーズは、差異化＝微分化と差異化＝分化、それぞれが持つ二つの側面がどのように連鎖するのかを問うている²²。つまり二つの異なる半身は全く類似していなくても、対応関係があるということをドゥルーズは言おうとしているのである。こうした関係は、関係＝比の変化性と変化性の値によって規定される特異点の割り振りという二つの側面を理解することで初めて理解されるだろう。二つの側面はきわめて多くの数学的表現とともに説明されており（ムラン、マイモン、ロンスキー）、正確な数学的理解とともに読解することが必要である。しかしこうした読解については、また別の機会に論じたい。

註

¹ 実際ドゥルーズは、『スピノザ』において「総合的視点に立とうと、分析的視点に立とうと、その出発点には当然、なんらかの結果が少なくとも「所与」の認識があることに変わりはない。だが、分析的方法は、条件づけではなしに発生の起源、いいかえれば他の事象についての認識をも与えてくれるような充足理由をそこに求めるのである」と述べており、ただ経験的要素を含むこと自体を批判しているのではないことが見て取れるだろう。Gilles Deleuze, *Spinoza: Practical Philosophy* (1970, 1981), p.152.

² Cf., Gilles Deleuze, *Différence et Répétition* (1968), p.233. 以下、DR と略す。

3. Cf., *DR*, p.270.
4. Cf., *DR*, pp.270-271.
5. Cf., *DR*, pp.219-220.
6. 理念が現象の構成に関わっている点については、ドゥルーズ『カントの批判哲学 (*La philosophie critique de Kant*)』が詳しい。理念はたしかに現象を構成することはないが、現象を構成する純粋悟性概念に関わることで間接的に現象に関わる（理念の統制的使用）。理念は現象を構成することがない以上、理念が現象界に現前することは決してない。現前すれば現象が構成的に使用されてしまい、これは矛盾であり、構成的に使用されているのは悟性である。だが、理念は純粋悟性概念を統率し、理念に収斂していく純粋悟性が現象を構成する以上、現象界はどこまでも理念に向かって探究することができるような世界として構成されていなければならない。つまり、理念が現前する世界としてではなく、理念に対して無限に探究していくことが保証されている世界として、カントが経験的自然科学の無限の探究を保障しようとしているのは明らかだろう。理念は未来の自然科学の基礎づけという役目も担っている。
7. *DR*, pp.220-221.
8. 外在的な事実へ依拠するカントの方法に対する反論としては、アプリアリな総合命題の権利問題の解決の不十分を指摘するものと、本稿では省いたが、事実という概念がそもそもきわめて仮定的であることを指摘するものがある。後者の点についてはドゥルーズも *DR* の pp.253-258 で思考の運動 (*le mouvement de la pensée*) に関して言及しているときに触れている。ドゥルーズは、思考の運動についてはゲルールのフィヒテ論 (*L'Évolution et la structure de la doctrine de la science chez Fichte*) を参考にしており、次に思われるが、ゲルールのフィヒテ論においては次のように説明されている。つまり、フィヒテの目論見が「知識学」、つまり知の知、知の運動の記述にあった以上、フィヒテは無条件的なものを知が得る際の、知の運動を分析せざるをえない。無条件的なものを得る際には、かならずある仮定が必要であり、その意味で無条件なものは条件づけられてしまうが、ここに思考の運動があり、仮定的なものから必然的なものへの移行がある。たとえば、もし因果関係が事実なのであれば、その因果律はこれこれの必然的な根拠によって基礎づけられていなければならない、という命題がそうであるが、これは思考の運動である。因果関係の根拠を問うには、そもそもとして因果関係が事実として仮定されていなければならない。ゆえに、因果関係の根拠は因果関係が実際に事実として存在しているかどうかにかかってしまうのである。このようにゲルールは分析していたが、ドゥルーズはこうした思考の運動理解、あるいは思考の運動に対する誤ったイマージュの歴史（これはプラトンからデカルトを経て、フィヒテあるいはヘーゲルへと至るひとつの歴史であるといわれる）を批判するのであり、思考の運動を新たに問題から問いへの運動として定義しなおす。本稿では問題とは異なる「問い」に関しては考察することができないので、別の機会に論じたい。
9. 作図の不十分さについては、ゲルールのマイモン論が詳しい。カントがいうように、我々がアプリアリにある性質を知ることができるのは、我々の悟性が自分で対象のうちに置いたものだけである。たとえば、「直線は二点間の最も短い線である」という命題は、「線」という主語に対して「真直ぐ」と「最も短い」という二つの悟性の規則が必然的に調和していることを意味している。カントに従って、二つの悟性規則が我々の悟性概念であるとしても、なぜこれら二つの悟性概念が必然的に調和するのは悟性によっては全く説明されず、ただ悟性とは（カントにおいては）全く異質な直観（作図）によってしか説明されないため、その普遍性と必然性を知ることはいかなる方法によっても明らかなるもの、ただの反復によるもつともらしさに過ぎないからである。したがっ

て作図によってはアプリアリな総合命題の正当性、その権利問題に答えられないのであり、だからこそマイモンはカントの権利問題の解決を批判するのである。

¹⁰ Cf., Martial Gueroult, *La Philosophie transcendentale de Salomon Maimon*(1931), pp.21-29.

¹¹ Cf., *DR*, p.233.

¹² *DR*, p.233.

¹³ *DR*, p.233.

¹⁴ *DR*, p.233.

¹⁵ ドゥルーズは数学やドイツ観念論など様々な分野を論じているが、ドゥルーズの読みには一貫性があるように思われる。ドゥルーズが『差異と反復』より前に書いた『ベルクソニズム (*Le Bergsonisme*)』において強調しているように、ベルクソンの哲学の最大の功績のひとつは、問題の持つ真偽を解の次元で解決せず、問題の次元で解決することができたということである(方法としての直観の第一規則)。Cf., *Le Bergsonisme* (1966), pp.3-11.

ドゥルーズは、問題／解という次元を普通の意味での問題／解だけではなく、あらゆる次元に見出ししていくのであって、ここにこそドゥルーズの一貫性は見て取れるだろう。たとえば、カントにおける理念／理念の産出した結果(現象、純粹悟性概念の統率)に関しても問題／解という図式で読もうとする。こうしてドゥルーズが、カントが理念を問題として提示している箇所にこだわるのもよく理解される。さらにドゥルーズは、問題／解という次元を拡大し、存在論のレベルまで引き上げる。超越論的境域／経験は、問題／解という次元で解釈されなおされ、それゆえ『差異と反復』におけるドゥルーズの存在論は、きわめて抽象的な、ひとつの問答法なのである。

¹⁶ Cf., *DR*, pp.269-271.

¹⁷ 積分法は、『ドラマ化の方法』においてフィロネンコがドゥルーズに述べているように、数学に留まる概念ではなく、哲学の、あるいは差異哲学の概念でもある。差異哲学において積分は、特殊な定数を伴って微分を意識化することである。微分は発生的要素であり、我々の感性的対象を構成するものであるが、それ自体で意識化することができないものである。たとえば、三角形の性質を知る際に、我々は作図を行うが、作図されている三角形はある長さ、ある定数を伴った三角形であり、三角形一般ではない。つまり我々の意識は、微分(例では三角形一般)をある定数を伴ってしかその対象にすることができないのである。だからこそ我々は目の前の対象から対象を構成している発生的要素へと微分することによって向かわなければならないのである。この意味で差異それ自体は意識の対象ではありえない。

¹⁸ *DR*, p.270.

¹⁹ 差異化＝微分化(*différentiation*)がフランス語において差異化と、そして数学における微分(法)を同時に意味する以上、ドゥルーズの問答法の理解には微分の数学的理解は必須であろう。実際ドゥルーズが理念に厳格な定義を与えるときには数学的表現を多用しているのであり、こうした数学的表現をないがしろにするわけにはいかない。しかしだからといって、数学からのみドゥルーズの問答法をとらえることは正しくない。ドゥルーズという微分法とは、哲学＝問答法に固有の方法なのであり、数学に回収されることは決してないからである。上の例では、原始関数が導関数を導いているが、問答法においては、導関数が原始関数を導かなければならないのであり、この過程が現働化なのである。さらには、数学においては、微分は原始関数から導関数を導くプロセスそのものを意味するが、問答法においては、微分はプロセスではなく、事物の理念的部分であり、数学の用語でいえば、導関数に対応するものである。このように『差異と

反復』の第四章で登場する多くの数学的表現を理解するときには、常にどこまでが問答法に関わり、どこから関わらないかを分析する必要があるだろう。

20. DR, p.271.

21. ドゥルーズにおいて「réalisation」と「actualisation」は全く異なる二つのプロセスである。本稿では前者を「実在化」、後者を「現働化」で統一する。ドゥルーズは『ベルクソニスム』、『差異と反復』の両方で二つのプロセスが異なっていることを示している、本稿では二つのプロセスの差異そのものについてはあまり触れていないので、ここで簡単に説明しておく。i) 実在化 (réalisation) は可能性が現実へと移行することである。ここで言われている可能性とは現実化したものから遡及的に得られた可能性であり、出来上がったものである (よく知られているように、ベルクソンもドゥルーズもともにこうして得られた可能性には批判的である)。そして実在化には二つの規則が存在する。①類似 (ressemblance)。可能性が現実化したものから遡及的に得られたものである以上、可能性と現実性には本性の差異は存在せず、まさしく類似している。たとえば、ライプニッツの可能世界はひとつひとつがすでに出来上がった世界であるため、そのうちのひとつが神の選択によって実在化してもその現実化した世界は可能的であったときの世界と同じままであり、この意味で類似している。②制限 (limitation)。可能性のすべてが現実化することはできず、一部しか現実化しないため、可能性は制限されなければならない。たとえば、ライプニッツの可能世界は複数のセリーからなっているが、実在化するののはひとつのセリーだけであり、他の諸セリーの実在化は制限されなければならない。ii) 現働化 (actualisation) は、潜在性が現実へと移行することである。そして現働化には二つの規則が存在する。①創造 (création)。潜在性は分化することで現働化し、自身とは全く似ていないものを創造することでのみ潜在している状態から現実へと移行する。②差異 (différence)、あるいは発散 (divergence)。潜在性は発散する線を創造することで現実化する以上、潜在性と現働性には常に本性の差異が存在する。これらの関係に類似は存在しない。また発散する線の間にも本性の差異が存在するのであって、現在と過去、植物と動物といった関係がそうである。Cf., *Le Bergsonisme*, pp.99-101.

22. Cf., DR, p.271.

参考文献

- Martial, Gueroult. (1929). *La Philosophie transcendantale de Salomon Maimon*, Paris : Alcan.
- Martial, Gueroult. (1930). *L'Évolution et la structure de la doctrine de la science chez Fichte*, Paris : Les Belles Lettres.
- Jules, Vuillemin. (1954). *L'héritage kantien et la révolution copernicienne. Fichte · Cohen · Heidegger*, Paris : PUF.
- Gilles, Deleuze. (1963). *La Philosophie critique de Kant*, Paris : PUF.
- Gilles, Deleuze. (1966). *Le Bergsonisme*, Paris : PUF.
- Gilles, Deleuze. (1968). *Différence et répétition*, Paris : PUF.